

忠臣・軍神の時代における森鷗外の『阿育王事蹟』の位置づけ

人間科学部児童学科 木内 英実

はじめに

森鷗外が本名森林太郎名で高楠順次郎校閲下において、大村西崖と共に明治42年1月に春陽堂より上梓した『阿育王事蹟』は、鷗外作品の中でも特殊な作品の一つである。内容として、^{註1}「仏滅後二百数十年の頃北印度に王として賢明の聞え高く、仏法弘通に力を注いだ阿育王（筆者注 アショカ王）の事蹟を記したもの」である点において、Edmund Hardy が著した *König Asoka* を主たる底本に置き和漢洋の参考書を用いて増補し日本語訳し、図版を足した点において、ドイツ語訳印度史料を原典とした歴史小説の観がある。

^{註2}『鷗外全集』第4巻後記の通り「大村西崖の著述と見る」という先行論により、鷗外の著作から外される事態にもっている。しかし鷗外の原稿（現在、大阪府立中之島図書館所蔵）が発見されたことにより、鷗外の著と認められ前掲新全集に収録されるに至った。

以上2点の理由から『阿育王事蹟』は鷗外の作品中、現在に至るまで研究論文が皆無に等しく評価が定まらない作品といえよう。

本作出版時に鷗外は47歳、陸軍軍医として明治27年の日清戦争、同37年の日露戦争と二度の大戦への従軍を経ていた。特に日露戦争出征時には陣中で「うた日記」をつくり、東京凱旋後の明治40年9月に春陽堂から出版した。

その後、鷗外は大正3年から同7年に至る第一次世界大戦開戦中の大正5年に退官する。本論は、東京が軍都化し軍人尊重の風潮が高まる中、『阿育王事蹟』において鷗外が表現したかったことは何か、「うた日記」及び軍都東京の時代考証により明らかとすることを目的とする。

1. 忠臣・軍神像が建立された都市空間

以下に鷗外が活躍した明治・大正時代に軍都東京に建立された時代を象徴する天皇の忠臣・軍神を模った銅像の内、『京浜所在銅像写真 第1輯 所伝記』（人見幾三郎著、諏訪堂、明治43年5月）に掲載されたものを時系列に以下に示す。番号に次いで、建立位置、完工年月、像モデル、像原型作者の順で記す。①麹町区靖国神社（招魂社）、明治26年2月、大村益次郎銅像、大熊氏廣（写真1）②麹町区丸ノ内東京裁判所、明治31年4月、山田顕義銅碑、石川光明③上野公園、明治31年11月、西郷隆盛銅像、高村光雲④芝公園、明治32年6月、小菅知淵銅像、藤田文蔵⑤麹町区霞ヶ関司法省、明治33年7月10日、楠正成像、高村光雲（写真2）⑥麹町区代官町近衛歩兵第一連隊、明治35年9月、北白川宮銅像、新海竹太郎⑦麹町区永田町参謀本部、明治36年10月、有栖川宮熾仁銅像、大熊氏廣⑧芝公園、明治36年11月、後藤象二郎銅像、本山白雲⑨麹町区九段坂上、明治38年4月、川上操六銅像、大熊氏廣（写真3）⑩麹町区霞ヶ関外務省、明治40年8月、陸奥宗光銅像、藤田文蔵

⑪麹町区九段坂上、明治 40 年 8 月、品川弥二郎銅像、本山白雲⑫麹町区霞ヶ関海軍省、明治 42 年 5 月、西郷従道銅像、本山白雲⑬麹町区霞ヶ関海軍省、明治 42 年 5 月、川村純義銅像、本山白雲⑭麹町区霞ヶ関海軍省、明治 42 年 5 月、仁礼景範銅像、朝倉文夫⑮神田区万世橋畔、明治 43 年 3 月、廣瀬武夫中佐・杉野孫七兵曹長銅像、渡邊長男（写真 4）



写真 1（石黒敬章『明治の東京写真』）

角川学芸出版 平成 23 年 3 月）



写真 2（出典写真 1 と同じ）

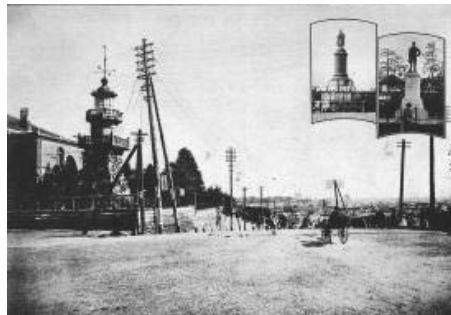


写真 3（小島又市『最新東京名所写真帖』）

明治 42 年 3 月 国立国会図書館

近代デジタルライブラリー）



写真 4（出典写真 1 と同じ）

①は幕末に活躍した長州藩の医師西洋学者兵学者であり維新十傑の一人に数えられる人物。大政奉還後の明治政府の基礎を築いた功績者の一人である。この銅像が東京に建立された西洋式銅像の最古のものとして知られる。②は長州藩士であり司法大臣を務めた人物。人物像はレリーフ。③は薩摩藩士で維新の志士。西南の役で新政府軍と対峙し没する。④は陸地測量部長で陸军工兵大佐であった人物。日本で初めて工兵隊を組織した。⑤は建武中興の際に南朝の後醍醐天皇を支えた忠臣であり、延宝 8 年徳川光圀は「嗚呼忠臣楠子之墓」と自らの文字で彫らせた楠正成墓誌を建立した。幕末維新时期に天皇を擁護した維新の志士たちにより、楠公と自分を一体視する風潮が起きたことから明治期の検定教科書『国語読本』巻 8、『修身経典』巻 4 にその功績が掲載され、国民的な忠臣としてシンボラ

イズされた。⑥明治 28 年に近衛師団長を命じられた人物。⑦明治 18 年参謀本部長、明治 27 年の日清戦争参謀総長を歴任。参謀総長として広島入りするも腸チフスにて逝去。⑧土佐藩士で維新の志士。⑨薩摩藩士で西南の役にて活躍。陸軍大将を歴任。⑩幕末維新期に坂本龍馬・勝海舟らと活躍した紀州藩士。維新後は外務省に出仕し駐米大使、外務大臣を歴任。⑪長州藩士で吉田松陰門下。維新の志士。内務大臣、枢密院顧問を歴任。⑫～⑯は薩摩藩出身の海軍軍人。⑰は西郷隆盛の弟。陸軍及び海軍軍人。元帥海軍大将、海軍大臣を歴任。⑱は海軍大将。⑲の廣瀬は海軍中将。海軍軍人。日露戦争旅順閉塞作戦において福井丸を指揮。敵艦魚雷を受け撤退する際に、自爆用爆発物を仕掛けに船倉に降りた部下の杉野が戻らないことから一人福井丸に留まった。救命ボートに乗り移った直後に被弾。戦死した。軍神第 1 号として文部省唱歌になる等、日露戦争の国民的英雄であった。

忠臣・軍神像が建立された意味について^{註3}「ヨーロッパでは権力者の支配が王像となってそのまま具体化されたのに対し、日本では天皇が直接騎馬¹像や立像となって民衆に対峙することはない。日本では民衆の前に姿を現すのは天皇の忠臣である。日本における偉人の像は、天皇にいかに仕えるかの規範を示すために都市空間に置かれる」との論が示すように、民衆を天皇主権の国家体制、即ち戦時体制に促すプロパガンダであったと考えられる。『東京銅像唱歌』(石原盤岳著 文盛館 明治 44 年 12 月)が出版され、大正元年 12 月には「廣瀬中佐」が文部省唱歌として発表されたように唱歌を通して忠臣・軍神の功績は広く知られていった。児童教育・学校教育の側面から子どもにも天皇への忠義を知らしめようとする取り組みがなされた。

⑨の川上像に関し南明日香は『荷風と明治の都市景観』(三省堂、平成 21 年 12 月)において、「極めて醜悪なる九段坂上の銅像」(永井荷風「帰朝者の日記」)、「あんな銅像をむやみに建てられては、東京市民が迷惑する。それより美くしい芸者の銅像でも拵らへる方が気が利いてゐる」(夏目漱石「三四郎」) という二人の文学者の批判を示した。鷗外と同時代の文学者が都市の美観の点で銅像を批判したのに対して、鷗外は沈黙を守った。

2. 陸軍軍医森林太郎による「うた日記」収録詩歌

鷗外は明治 37 年の日露戦争には第二軍医長として従軍し、『阿育王事蹟』上梓直前の同 40 年 11 月陸軍軍医監に着任した。同 37 年 4 月 19 日の『都新聞』には「軍医監森鷗外の『出征に際しての軍歌』」という記事が収録された。「文壇には鷗外または隱流の名を以って知られたる医学博士森林太郎氏は、軍医監として出征の途次、広島に於いて『第〇軍の歌』を作り、摺り物として軍隊及び知友の所に配布せられたり。その句は、 海の水こごる、 北国も、 春風いまぞ、 吹きわたる、 三百年來、 跛扈せし、 ロシヤを討たん、 時は来ぬ。 十六世紀の、 末つかた、 ウラルを越えし、 むかしより、 虚名におごる、 あだびとの、 真相たれか、 知らざらん。 ぬしなき曠野、 シベリヤを、 我が物顔に奪いしは、 浮狼無賴の、 エルマクが、 おもい設けぬ、 いさおのみ、 黒龍江畔、 一帯の、 地を略せしも、 清国が、 長髪賊の叛乱に、 つかれしからの、 僥倖ぞ。 勇あり智なき、 スエーデン、 武運つたなき、 ポーランド、 齒にたつものなきなりに、 我慢は世々に、 つわり来ぬ。 海幸おおき、 権太を、 あざむきえしが、 交

換か、わが血を流しし遼東を、併呑せしが、ナニ租借。鉄道北京に、いたらん日、支那の瓦解はまのあたり、韓半島まず、滅びなば、わが国いかで、安らかん。本国のため、君がため、子孫のための、戦いぞ、いざ押し立てよ、聯隊旗、いざ吹きすさめ、喇叭の音。見よ開闢の、昔より、勝たではやまぬ、日本兵、その精銳を、すぐりたる、奥○將の第○軍。」という内容だが、同歌は「第○軍」を「第二軍」、「奥○將の第○軍」を「奥大將の第二軍」に修正し「うた日記」に「第二軍 明治三十七年三月二十七日於廣島」として収録された。

勇ましい軍歌としての「第二軍」の後、^{註4}「うた日記」は徐々に傾向が変化していく「うた日記 頃石」中の9詩に関して、「十人」「子もり歌」はロシアとの戦いに敗れたポーランドの兵士や銃後に残された母子を題材にし、「喇叭」「基督の木」はドイツの軍を題材にしている。出征後の戦地では目の前の辛い現実ではなく欧洲大陸の戦線に思いをはせ空想世界を彷徨うような詩歌が多い。「うた日記 無名草」中の9詩に関して「えのしま」には「江ノ島」が「海」には「鶴沼」がと、地名の詠みこみを通して、凱旋後の現実生活が反映される。

「うた日記 無名草」中の歌「死いろの 歌に倦む世や 口によぶ 王者にとほき 霸者のときめき」に注目すると、「死いろの歌」つまり軍歌や戦争詩が人口に膾炙される戦時体制下を反映している。特に前歌が「晶子曼荼羅」を詠み、与謝野晶子に向けられた歌であることから、「死いろの歌」は晶子の「君死にたまふこと勿れ」(初出『明星』明治37年9月)を意識した語句と推測される。唱歌「広瀬中佐」や『東京銅像唱歌』を日本人が口ずさむ時代に、王者と霸者との違いを鷗外が意識化していることが興味深い。そこで鷗外にとっての王とはどのような存在か、『阿育王事蹟』に描出された王権に注目したい。

3. 『阿育王事蹟』に描出された王権

特に鷗外が執筆した壹・参・伍・拾貳・拾參・拾伍・拾陸・拾質・拾捌の章を注視すると、壹章は阿育王の治世以前の印度史、拾伍章から拾捌章までは阿育王の治世以後19世紀までの印度史について記述されている。参章の内容は阿育王の刻文がある9基の石柱について、石柱の建立場所、状況それら7柱の刻文の紹介である。伍章の内容は帰仏の経緯とバラモン教・アジイヰカ(バラモン教の新派)・ジャイナ教等の信教の自由を認めた理由についての説明である。拾貳はB.C.250年頃の王による仏教遺跡巡礼の旅における各地での布施供養の様子についてである。拾參章の内容は王の眷属(家族)についての記述である。王妃微沙落起多の王が大切にしていた仏陀の象徴である菩提樹を枯らそうとしたこと、拘那羅太子に恋をし挑んだものの太子が応じなかつたことを恨み太子の両眼を抉り取り放逐した悪女エピソードも収録される。

参・伍に関して『阿育王事蹟』原稿を菅見すると、鷗外の原稿の一部は大村によって削除の線が入れられ抹消されている。「森鷗外先生初めハルディの『阿育王』を抄訳し、余に勧むるに、これを増補して同著となさむことを以てす。(中略) 刻文を訳し、図画を加へ、以て全くその稿を改む」と大村は述べるが、大村の稿にも他者の朱筆が入っており、頁数が訂正されている。高楠を校閲者として

いることからも鷗外は大村執筆箇所にも眼を通していいたと考えるのが自然である。参の中心は大村が訳出したと言う石柱の「刻文」である。「刻文」に描出された王権について以下に示す。

刻文第一章は「達磨（筆者注 仏法）の無上の帰依、無上の猛省、無上の従順、無上の怖畏、無上の勢力に依らでは、現世並びに後世を安固にすることいと難し。」と前世後世の安定のもとに仏法をおき、自らの信仰を表現した。「達磨に合へる保護、達磨に依る規律、達磨に依る福祉及び達磨に依る安固」を施策することを宣言した。第二章では「達磨とは」「慈悲、衆善業、憐愍、眞実、清浄を要す」ことを説明した上でこの教えに従う者は「當に善を為すべし」と人々の行動や心情の理念を示した。第三章は諸侯、持縄者、地方官の行動に言及した。具体的には「父母に順なるは善なり。朋友、知己、親族、婆羅門及び沙門に仁なるは善なり、生命の神聖を重んずるは善なり、驕奢及び暴言を避くるは善なり」という「達磨を宣揚すべし」とのことである。第四章は達磨の増長即ち「生物殺戮の停止、有情残害の禁断、親族に恭謹、婆羅門及び沙門に敬虔、父母に従、長者に順なることを増長す」ることを善とする宣言である。以上のように「達磨」の「増長」「宣揚」に関する宣言は十四章に至る。その中で戦争について言及した十三章について考察する。そこでは「縱令人ありて傷害を加へむとも、天愛は能く堪へらるべき限り堅耐忍辱せざるべからざることを持す。(中略) 天愛以為へらく。達磨に依る征服はこれ最勝の征服なり」と考えを述べる。つまり強国の王として他国を武力で征服し民を殺戮した反省に基づき、不殺生と仏法による国家の精神的統一を宣言したと言つても過言ではない。聖王による統治の理想的なあり方を十三章の阿育王の刻文に認めることができる。

おわりに

上記2の「うた日記 無名草」中の歌において表出された鷗外における王者と霸者との相違は、前者を3にて確認した阿育王に象徴される仏教学・インド哲学による国家統一者、後者を1で一覧化した軍都東京に建つ忠臣・軍神像に象徴される戦時の武力行使者と対比することによって明確化した。鷗外がどちらの立場に共感を覚えたのかは、第一次世界大戦に従軍せず、大正5年に退官した行動からも明らかである。

忠臣・軍神の時代に『阿育王事蹟』の出版を意図したことは、日露戦争出征経験のある軍人鷗外にとって理想的国家希求の結実と軍歌を創ったことへの反省、及び戦時体制下プロパガンダへのささやかな抵抗を考えることができる。荷風と漱石が都市美観の点から忠臣・軍神像を批判したのに対し、鷗外は「阿育王」の石柱考証を通して忠臣・軍神像が表す国家の精神性の貧しさを暗に批判した。

後記 本稿は2013年4月28日（日）大阪市たかつガーデンにて開催された「楽しい0-gaiの会」における上田博先生のご発表「戦場のツイッター 鷗外『うた日記』の隙間から」に着想を得て執筆したものである。この場を借りて上田先生に感謝申し上げたい。

¹ 「校勘記」森潤三郎『鷗外全集』著作篇第9巻（岩波書店、昭和12年7月5日）

² 岩波書店、昭和47年2月22日

³ 『よみがえる明治の東京—東京十五区写真集一』玉井哲雄編・石黒敬章企画・土居義岳他5名執筆、角川書店、平成4年3月20日

⁴ 『鷗外全集』第19巻、岩波書店、昭和48年5月22日